

人の間の建築

Architecture from people connectivity

KJ PLUS VOL.3

渡辺治建築都市設計事務所

OSAMU WATANABE ARCHITECTS



幼少～大学時代：宇宙物理から建築へ

父、渡辺昇は北海道大学の土木学科橋梁工学で研究室を持っていた。父親の寝室と書斎は、計算書と図面で溢れており、父は深夜まで部屋にこもって仕事をしていた。

母方の祖父、齋藤三郎は同じ大学の理学部の教授だった。小学生になった著者は、休みのたびに札幌の郊外に住む祖父の家に行き、一緒に山歩きをしながらスケッチと生物観察をしていた。

小学校では、漫画クラブを作って来る日も来る日も漫画を描いていた。中学では、自然科学と宇宙に興味を持つようになり、顕微鏡で微生物の写真を撮影し、天体望遠鏡を作り飽きもせず毎日夜空の星を観て写真に納めていた。

その一方で、陸上、吹奏楽クラブに所属し、寝る間も惜しんで活動した。高校では地学部をつくり、やっぱり宇宙物理の本を読み漁っていた。当時、京都大学が日本では最大の太陽望遠鏡を所持していたので、京都大学に入学しようとしたが、父に反対され北大の理学部に入学した。

建築への道を決めた大学時代

北大に入り、理学部に進むはずだったが、教養学部で建築家兼画家の東弘孝先生の勧めで建築学科に進学した。

その時は宇宙物理の道をあきらめておらず、建築家になって天文台を

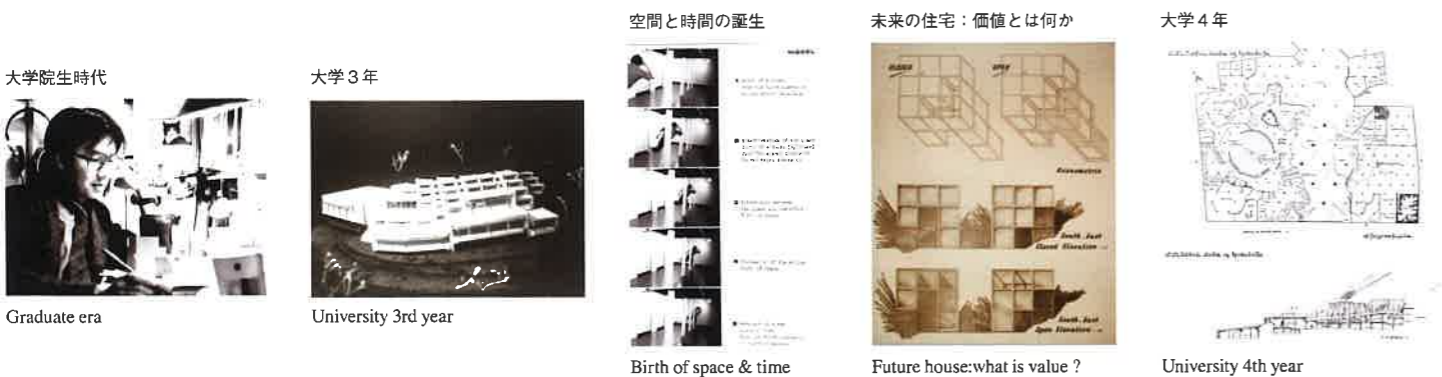
作ればよいと言われ、決めたのだった。建築の技術的な側面には興味があったが、3年になった時に、建築の文学性の部分に気づき、それからは製図室から帰らなくなった。要は、建築に捕らわれてしまったのである。

そうしている内に卒業を迎えてしまい、大学院に進学してもっと建築を勉強しようと思ったが、その時にはまだ設計に進むかどうかは決めていなかった。

進学するとすぐに東京に行き、横文彦、宮脇檀、内井昭蔵、北川原温、山下和正、東孝光、菊竹清訓、象設計集団、山下設計、日本設計、日建設計などの事務所を訪問し、建築についてあれこれと尋ねた。設計している人たちの事を知ることができたのである。

故大竹康市氏は扇風機もない蒸し暑い部屋で汗を原稿用紙に垂らしながら文章を書いていた。話す内に、ここで働いていかないかと言われ、象設計集団の仕事に参加させてもらうことになった。建築家たちは、東京にきなさいと言い、東大に進学することを勧められ、博士課程に入学することになった。

その数年後、大竹氏はサッカーの最中、クモ膜下で帰らぬ人となった。その時の建築雑誌では、「目もくらむほどの可能性を残して彼は逝った。(正確ではないかもしれないが)」と書かれていた。大竹氏に会って、このような素晴らしい人が熱中する建築の設計にたずさわりたいと心に決めた。



From childhood to college: From astrophysics to architecture

My father ,Dr. Noboru Watanabe, had a laboratory at the Department of Bridge Engineering (now in the Course of Civil Engineering under the Department of Socio-Environmental Engineering) of Hokkaido University, which is a national university in Hokkaido.

His bedroom and study room were full of papers of calculations and drawings, and he kept working in the room until late at night.

The maternal grandfather was a professor at the Department of Fisheries Sciences in the Faculty of Science (now in the Applied Marine Science) at the same Hokkaido University. As an elementary school student, I used to visit my grandfather's house in the suburbs of Sapporo every weekend and holidays and enjoyed sketches and observed living things while taking a walk together with my grandfather.

At that time, I found a manga (cartoon) club and drew manga every day.

At junior high school, I became interested in natural science and the universe. I took images of microorganisms with a microscope, made an astronomical telescope, untiringly watched and took images of the night sky stars every day.

On the other hand, I actively belonged to the track-and-field-club as well as brass band club without sparing time for sleep.

In high school, I found a geoscience club, and again read widely astrophysics books.

At that time, Kyoto University had the largest solar telescope in Japan, which tempted me to go there for a college degree, but my father opposed himself to the idea. After all, I entered the Faculty of Science at Hokkaido University.

College era that decided the way to architecture

I was supposed to go to the Faculty of Science in Hokkaido University, but ended up to the Department of Architecture under the Faculty of Liberal Arts instead following the recommendation from Professor Hiroataka Azuma, an architect and painter. At that time, still I didn't give up studying astrophysics. So he suggested to me that I should become an architect to build an observatory, and then I decided to take his suggestion.

I was interested in the technical aspects in architecture, but in my third year at college I found the literary aspects of the field. Since then, I never left the drafting room, in a word, I was trapped in architecture.

While doing so, my graduation day came. I made a decision to study more architecture in the graduate school, but not yet decided whether to go to design at the moment. I went to Tokyo right after entering the graduate program to visit Fumihiko Maki, Dan Miyawaki, Shyozo Uchii, Atsushi Kitagawara, Kazumasa Yamashita, Takamitsu Azuma, Kiyonori Kikutake, Atelier Zo, Yamashita Design, Nihon Sekkei, Nikken Sekkei, etc. for asking about the architecture. Just I wanted to know about people who design architecture.

The late Yasushi Otake was writing with sweat dripping on manuscript paper in

内井昭蔵氏は「君のような無鉄砲な人はアメリカに行くといい。」と言った。

アメリカへ

大学院の時に出したアイデアコンペが最優秀賞となりその賞金を手にアメリカに渡った。

始めてアメリカに行った時は場所を探してニューヨークのクイーンズ区にある Forest Hills Gardens という住宅地の2階のことも部屋に落ち着いた。

間もなくして、ミノルヤマサキ事務所に勤務していた建築家近藤氏(当時すでに事務所はなく、戸田アメリカに勤めていた)、ルイス・カーン事務所にいた工藤国男氏と知りあう。

私は、近藤氏に頼んで、リチャードマイヤーの事務所に連絡していただき、巨匠建築家訪問を始めた。

リチャード・マイヤーを皮切りに、フィリップジョンソン、I.M.Pei、ミッチェル・ジョゴラ、マーフィー・ヤーン、マイケル・グレイブス、SOMなどの事務所を訪ねた。正面から会いに行くと、「ジョブ探しならお断り」とあれこれ尋ねられるので、秘書が帰る17時過ぎに行くようになった。

そんな中、私が勝手に師とあおぐ岩本和明氏と I.M.Pei 事務所で出会う。事務所をひと通り巡ったのち、今度は大学巡りを始めた。



a sultry room without a fan. While talking, I was asked if I could imagine myself to work there, then became a member of Atelier Zo, an architects design group. Other architects convinced me to come to Tokyo and to go to the University of Tokyo. This made me decide to enter the doctoral program in Architecture. A few years later, Otake passed away due to subarachnoid arachnoid during a soccer game. An architectural magazine at the time wrote, "He died, leaving dazzling possibilities behind. (if my memory serves me correctly)." An encounter with Otake made up to my mind to be involved in architectural design in which such a wonderful person, like Otake, was absorbed. Shozo Uchii said to me, "Madcap people, like you, should go to the United States."

To USA

My graduate work won the Grand Prize for the idea competition. And I went to the United States with the prize money.

When I first went to the United States, I searched for a place and settled down in a children's room on the second floor of a residential area called Forest Hills Gardens in Queens, New York.

Soon, I met Mr. Kudo, an architect who worked for the Minoru Yamasaki architect office,

I asked Mr. Kudo to facilitate me to visit prestigious architects, such as Richard Meier, Philip Johnson, I.M.Pei, Mitchell Jogora, Murphy Yarn, Michael

丹下憲孝氏がハーバードの博士課程に、團紀彦氏がイェール、坂茂氏はクーパーユニオンで勉学に励んでいた。彼らはすでに自己を形成しつつあり、日本の建築界で大きな存在になるだろうと思った。

遠距離バスで、時にはヒッチハイクで近代建築を見て回った。その時に見た、リチャード・マイヤー、ルイス・カーン、ミース・ファン・デル・ローエ、フランクロイド・ライト、エーロ・サーリネンらの建築は、アメリカのそれぞれの場所で際立っていた。タリアーセン・ウエスト、アーコサンティはそれぞれこれまで3回訪ねた。

当時の私は、どうしてもアメリカに留学しなければ、という気持ちになっていた。

ペンシルバニア大学

日本に帰国してからすぐに留学のための準備と勉強を始め、1年後には再度アメリカの土を踏んでいた。

入学が許されていたペンシルバニア大学に在籍する。コロンビア大の建築学科の学科長だったケネス・フランプトン教授は卒計の「廃墟になるべき建築」に興味を示しペンシルバニア大学からの移籍を約束する手紙を送ってくれた。

一方で、ペンシルバニア大では丸山欣也氏(アトリエ・モビル)と学科長の Adèle Naudé Santos に出会い、一緒にハワイのオアフカレッジの設計コンペに参加することになる。コンペは1等を獲得した。

Graves, SOM, and so on. Th official visit was usually rejected by their secretary giving me many questions to make sure of whether I was here for a job hunting. So my visit time became after 5 p.m., when the secretary usually went home. Meanwhile, at the I.M.Pei office, I met Mr. Kazuaki Iwamoto, who became my lifelong teacher later on.

After a thorough investigation of the offices, next I started visiting universities where Japanese students studied architecture, such as Yale, Princeton, University of Pennsylvania, Harvard, IIT, MIT and etc..

At the time, Noritake Tange, who was a son of Kenzo Tange, in the doctoral program at Harvard University, and Norihiko Dan was at Yale University, and Shigeru Ban was at Cooper Union. I sensed that they already formed a unique personality enough to show their strong presence in the Japanese architectural world, eventually.

Also I traveled around to see the modern architecture by the Greyhound Bus, or sometimes hitch-hiking. Especially Arcosanti and Taliesin West attracted me to be there three times. The architecture of Richard Meier, Louis I. Kahn, Mies van der Rohe, Frank L.Loid Wright, Eero Saarinen etc., stood out against each place in the United States.

At that time, I felt like I had to study abroad in the United States.

At University of Pennsylvania

I prepared for study abroad right after the US trip, and one year later I set foot on

アデルはコンペのお返しだと言って、パリのボザール、ペニス大学のサマースクールの授業料を奨学金で負担してくれた。

また、生涯の友人となる、ルイス・カーン事務所にいたガボにも出会う。丸山欣也氏と卒業生のアグネス・カーンとで設計したベンジャミン・フランクリン・ハウスの1階の花屋の内装が実現し、そのロビーの設計、最後はファーンズの美術館と超高層を連結し全体を建て直す大きなプロジェクトにまで発展する。

そうしている内に、コロンビア大学への移籍する意思はなくなっていた。

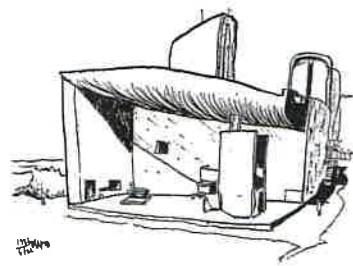
卒業時にはニューヨークのRizzoli（出版社）の一室に書齋を持つフランプトンを訪ね、Pen大での図面を見せた。フランプトンは「Good Job!」と言ってくれた。

しかし、岩本氏は「君のような奴は建築家にならない方がよい」と言う。「『It's mine, it's mine.』（これは私の作品）と言う建築家は建築家ではない。建築家たるもの、超えたもののために常に上を目指してなければならぬ。」がその理由だった。

岩本氏は香港の中国銀行の担当者で日本に立ち寄る時には私のところに宿泊し、ほとんど寝ずに建築の話をした。I.M.Pei事務所の線の決め方、高いデザインとは何か、美しさとは、などなど。

岩本氏ほど、真剣に建築に對峙している人物は見たことがない。いつの間にか、岩本氏と同じ方向を見るようになっていたのかも知れない。

ロンシャン礼拝堂



Chapelle Notre-Dame du Haut

フィレンツェ、ダビデの丘から



Florence, from the David Hill

ペニス



Venice

ボザールでの授業風景



Beaux Arts, Class scenery

その頃、吉本隆明が「像としての都市」という本を書く。その本の中で、「わたしたちは建築家なるものの存在を知っている。彼らはなにをする男たちであるか。なんのことはない。図面でジャーナリズムに登場したがる男たちを指すにすぎない。その図面を街や広場に実現されれば、多くはただ醜悪をつくりあげているにすぎないことが実証される。」と吉本は建築家を評していた。私はそれにすっかり共感してしまった。かくして、「目立った建築家」への道は閉ざされたが、この言葉のおかげで、建築に集中することができた。

東大の高橋鷹志研究室のこと

研究室は、大抵は無人だったがゼミには皆が出席する。東大の高橋鷹志研究室はやっていることが実に面白く、ゼミが終わってその足でアメリカに飛んで、次の週のゼミに間に合うように早朝帰国してゼミに参加するぐらいであった。

建築学科なのだが、人の頭の中ばかり研究している。しかしそれが設計に直結して役立つ。

学生時代に受けた赤坂にあった住友電工ビルの食堂とカフェの設計の際には、既存の食堂の人間行動を観察し、誰もが納得する案に着地し、利用者は増え、会議室もでき、住友の会長さんに深々とお礼され、びっくりしたこともあった。

当時の私は、設計と研究調査に明け暮れ、他の学生同様、大学にはほ

とんど行かなかった。在籍して3年目の時に、仕事の節目に時間を確保して博士論文を書き上げた。しかし高橋教授になんの相談もしていなかったため、逆鱗に触れ、博士論文は半年間、教授の引き出しの中に置かれ、その間教授の勧めで四国の集合住宅の設計に参加した。そうしているうちに、ある日、大学から博士課程修了の通知が届き、自動的に卒業となった。設計の時には人を研究するとかならず、納得のゆく案に到達する、私は今でもそうしている。

実務(20代~30代)

ある時に菊竹清訓先生から千葉工大の授業の代わりに頼まれて津田沼に通うようになった。

バブル経済期は猛烈に仕事があり、2日に6時間の睡眠で走りつづけ、設計仲間は過労死する者もいた。

学生であったが、竹芝ふ頭船着場の開発、大阪のりんくうタウンの都市計画案作成、長岡市の大規模な造成計画、都心3区の居住計画などをシンクタンクからの委託でやっていた。

そんな時に日本設計の森林兵衛氏に幕張メッセ駅前の大規模な商業施設プレナ幕張の設計への参加を誘われた。

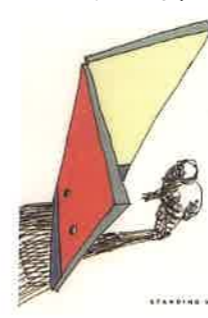
バブル経済まっただ中で、工事費高騰のあおりで、自分の設計はまったく実現しなかったため、その誘いを受けることにした。実務を学ぶ

住友電工 レストラン



Canteen in Sumitomo Electric Co.

スタンディング・ウォール



"Standing Wall"

住友電工 カフェ



Cafe in Sumitomo Electric Co.

理化学研究所 レストラン



Canteen in RIKEN

and also a meeting room was formed there, then the Chairman deeply thanked me for the achievement, which made me surprised.

At that time, I totally devoted myself to design and research so that I rarely went to college, just like other students. In my third year, I completed my doctoral dissertation in my spare times at work. However, since I had no consultation with Professor Takahashi about my doctoral work, he was angry enough to let my doctoral dissertation sit for a half year in his drawer. During that time, I was invited by the professor to participate in the design for housing complexes in Shikoku. In the meantime, one day, I received a notice from the university that knew my completion of the doctoral program, and I automatically graduated. Whenever it comes to design, studying people lead us to a convincing plan, I still do so.

Practical Works (twenties to thirties)

At one point, Professor Kikunori Kikutake asked me to take the place of his class at Chiba Institute of Technology, and I started going to Tsudanuma.

During the bubble economy, a workload was unbelievable heavy so that our sleeping time was only six hours in total for two days and some of my colleagues died from overwork.

Although I was a student, I had worked with a subcontract work from a think tank to develop a plan for the Takeshiba Wharf Pier, create a city plan for Rinku Town in Osaka, a large-scale development plan in Nagaoka, and a plan to live in

よい機会だと思ったのだ。

森氏はケニアで仕事をした経験があり、ローテクな発想をハイテクなビルに昇華させる独特の設計アプローチを持っていた。風洞実験は透明な模型をつくり、煙草の煙と扇風機でおこなわれた。私たちが建物の中の熱や空気の動きにこだわるのは森氏のDNAが入っているのだろう。

そして、実施設計と現場に2年半を費やし、最後は、栃木県庁舎のコンペに参加し勝ち取ったところで日本設計を離れた。

その時の日本設計の同志坂本健氏（現板橋区長）から多摩川幼稚園の設計を助けて欲しいとの要請がありそれからつながり幼稚園、保育園の設計の機会が増えていくことになる。

一方で小野田セメント（現太平洋セメント）のプロジェクトで出会った東京ケーターリングの顧問を20年以上務めることになり、多くの省庁、病院、大学、企業、保養所などの食堂の設計をおこなうこととなり、その流れで和光市の理化学研究所のレストラン棟の設計をおこなうことになった。

東京ケーターリングからは、顧問料という形で20年以上支援していただき感謝に堪えない。

独立して最初の建築の設計はその理化学研究所と多摩川幼稚園だった。施工者は大成建設と竹中工務店で、現場で苦しみ体重が7キロ減ってしまった。建築の実務は現場で身につけた。

the three central wards of Tokyo.

At that time, I was invited by Mr. Rinbei Mori of Nihon Sekkei to participate in the project designing the large commercial facility, Plena Makuhari in front of Makuhari Messe Station. In the midst of the bubble economy, my construction was not realized at all due to soaring construction costs, at the same time, I thought it was a good opportunity to learn from practical work, so I accepted his offer. Mori had working experiences in Kenya and took a unique design approach to transforming low-tech ideas into high-tech buildings. The wind tunnel experiment was conducted with cigarette smoke and a fan in a transparent model. It is likely that Mr. Mori's DNA is involved in our focus on the heat and air movement in the building.

I spent two and a half years on practical design and on-site, and finally, after participating in a competition in the Tochigi Prefectural Government Building, I left Japan Design. Ken Sakamoto (the current mayor of Itabashi Ward), one of my fellow of Nihon Sekkei at that time, asked me for a help in designing the Tamagawa Kindergarten, which led to an increase in opportunities for designing kindergartens and nursery schools.

At the same time, I got a chance to become an advisor of Tokyo Catering Corporation, which met me on a project of Onoda Cement (now Taiheiyo Cement). for over 20 years, which brought me opportunities to design a number of cafeterias for government agencies, hospitals, universities, businesses, and recreation facilities. This led to the design of the restaurant building at RIKEN in Wako City. I can not stand thanks to Tokyo Catering Co., Ltd. enough for

裏方のスタッフが働きやすい設計をするようになったのも、東京ケー
タリングで培ったものである。

イギリスのこと

幕張の現場に常駐している際に、東大の高橋鷹志教授からイギリスの
マンチェスター大学にポストグラデュエイトコースをつくるので、参
加しながら手伝って欲しいとの要請で10週間のコースに参加した。

コースはロンドン大学のMartin Symes教授と高橋教授が考えて立ち上
げたもので、マンチェスター大学のNecdet Teymur教授が担任だった。
イギリスは、経済国から観光国に移行しようとする最中で、全ての教育
を見直している最中で、Symes教授は国からの要請を受けCase Study
という特殊な演習課題をおこなっていた。実際にあったプロジェクト
の資料が配られ、例えば病院の演習で学生は施主や看護婦を演じ、実
際の設計業務を体験する授業だった。

週末にはレンタカーでイギリスとスコットランドをくまなく見て回っ
た。古い城は、屋根が朽ち落ちており、2重シリンダーの間にある階
段を登り降りしながら、シリンダー内に入ってくる自然光がどのよう
に変化するかを体験し覚えた。今でもこのとき体験した光は、設計に
役立っている。(下スケッチ)

そこにはルイスカーンも来たに違いないと思った。

また滞在中に、イギリスのまちの活性化プロジェクト、バブルが崩壊

した仕組みを調べた。

イギリスから帰って2年もしない内に、日本のバブルは同様なメカニ
ズムで崩壊した。

お金は人を狂わす。そして価値あるものは何も残らなかった。

それからそのコースの日本事務局を10年勤め、50人以上の留学生をそ
のコースに送り込んだ。

建築設計事務所

最初は東横線の元住吉駅のマンションの1室、それから同駅で安藤忠
雄氏が基本設計、最終的に北山孝二郎氏が引き継いだビルに設計事務
所を移した。

東横線が混んでくるようになって、現在の川崎区鋼管通にあるメッキ
工場跡に落ち着いた。

1階の空間は地元の劇団や高校生などに使ってもらっている。

数年前、後ろの空き家を改修し、工房と宿泊空間を作った。

川崎区に移動してきた頃、故君嶋武胤川崎区長は東大の都市工を卒業
していて、よく事務所に現れアートイベントや廃校利用のことを話し
企画した。

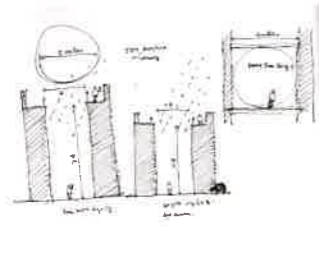
その高校を県はなんの説明もなく壊し、市によって商業施設を誘致する
という都市計画が描かれ、私たちは校門前で651日にわたる抗議運動を
商店会や地域住民の方々とおこなった。設計事務所活動を20年

故 Martin Symes 教授 (左) と
故 Necdet Teymur 教授



Left: Late Professor Martin Symes and
Late Professor Necdet Teymur

自然光の記録



Note of natural light

商店会長との記者会見：
ここから校舎保存運動が始まる



Press conference with the store chairman : from
here, the school building preservation movement
begins.

事務所1階のマルチスペース



Multi space at 1st floor in office

their over 20 years' financial support. My first architectural designs as an
independent designer were made for RIKEN and Tamagawa Kindergarten. The
builders were from Taisei Corporation and Takenaka Corporation, and
challenges on construction sites made me lose seven kilograms, but instead I
gained knowledge of the architectural practice on the site. Our worker-friendly
design was an idea from also something we cultivated in the project from Tokyo
Catering Co.

At British

When I was stationed at the Makuhari site, Professor Takashi Takahashi at the
University of Tokyo asked me for help to launch the new postgraduate course
at the University of Manchester in UK, while attending the 10-week course.

The course curriculum was designed by Professor Martin Symes at the
University of London and Professor Takahashi. Also the program director was
Professor Necdet Teymur at the University of Manchester.

The UK was in the process of transitioning from an economy country to a
tourism destination and it had reviewed all education systems at that time, then
Professor Symes conducted a special exercise, called a "Case Study", at the
request of the government. The materials of the actual project were handed out,
for example, in a hospital exercise, the students played a role of the employer or
nurse, and experienced the design management in a real-world setting.

On weekends we drove all over the UK and Scotland by renting a car.

At the old castle in Scotland, by which I was in particular impressed, its roof

decayed, and as I climbed the stairs between the double cylinders, I learned how
the natural light entering the cylinders changed. Even now, the light image
which I got in my mind is useful for designing. I thought Louis I. Kahn must
have come there. During my stay, I investigated how the bubble burst as well as
a revitalization project in the UK.

Within two years of returning from Britain, the Japanese bubble burst with the
similar mechanism. Money drives people crazy. And it was not worthwhile
remained. Then we were in charge of the course's Japanese secretariat for 10
years and sent over 50 international students to the course.

Architectural design office

We initially set up our design office in one of the apartments at Motsumiyoshi
Station on the Toyoko Line. We moved to a building around the same station,
which Tadao Ando did the basic design for and Kojiro Kitayama took over the
design and finished up.

As the Toyoko Line became crowded, we moved again and settled into the old
plating factory at , Kawasaki City.

The space on the first floor is open to theater companies or musicians as well as
high school students. A few years ago, we renovated the vacant house in the
backyard to create a workshop and accommodation space, When I moved to
Kawasaki Ward, the late Mayor Kimishima Takese Kawasaki graduated from
urban engineering at the University of Tokyo and often appeared in the office to
talk about art events and the use of closed schools.

経ったころ、賞などは縁がないと思っていた。

ある時に、日本工業大学の非常勤講師を務めていた時に、若林祥文先
生が私のクラスを見学に来られて、先生に「最近面白い建築見ましたか。」
と尋ねたら、「ジョンソントンという面白いまちを観た」といい、「ジョ
ンソントン都市景観大賞に応募したらいい。」と言っていた。その
景観大賞の審査に陣内秀信先生がやって来られた。

先生は長時間滞在されて見て回ったのち、今度は建築学会賞に応募し
たらと勧めていただいた。

そもそも、私が大学生の時に、陣内先生がイタリアの本を出版され、そ
のオシャレな内容にショックを受けて景観研究の道を選んだのだった。
その結果、横文彦先生の勧めで東大の高橋鷹志研究室に入ることになる。
その陣内先生が目の前に現れて「世界中のまちを見てきたけれど、こ
んな面白いまちは見つけない」と言う。

ジョンソントンは、障がい者、高齢者、若者たちが住んで働き、夢
をかなえる場所になった。ニューヨークのForest Hills Gardensに住
んでそのようなまちをつくりたいと思ってから今年で35年、その悲願
はかなったようだ。

一方で、25年前始めて設計した建物が幼稚園と研究所だった。幼稚園
は幕張の商業施設の現場でテーブルを並べていた坂本健現板橋区長の
紹介。

そこから人がつながり、特に多摩川幼稚園の長谷川安年先生、長谷川

ジョンソントンに審査に来られた
陣内秀信教授 左:磯野商会磯野達雄社長、
中:磯野章雄氏



Professor Hidenobu Jinnai visited
the Johnson Town
Left: President Tatsuo Isono, Isono Shokai,
Middle: Mr. Akio Isono

東大の高橋鷹志名誉教授と
妻渡辺 (川合) 麻美
高橋先生の建築学会大賞祝賀会



Professor Emeritus Takashi Takahashi and
wife Asami Watanabe (Kawai)
at Professor's Architectural Institute
Grand Prize celebration

The prefecture destroyed the high school without any explanation, and a city plan
was drawn up to attract commercial facilities by the city, and we held a 651-day
protest in front of the school gate with the association and local residents.

After 20 years' direction of my design office, I thought that I was nothing to do
with a prize. When I taught at Nippon Institute of Technology, as a lecturer,
Prof. Yoshifumi Wakabayashi visited to see our class. I asked him, "Did you see
interesting architecture recently?" He replied, "I saw an interesting town called
Johnson Town." Also he suggested to me to apply for the Cityscape Awards with
Johnson Town work. Prof. Hidenobu Jinnai came to Johnson Town as a judge
of the Landscape Grand Prize. He stayed for a long time to look around, and
then suggested me to apply it for the Architectural Institute of Japan Award.

In the first place, when I was a college student, I was so impressed by the book
written by Professor Jinnai, which was full of fashionable contents about Italian
town landscape, that I chose the career as professional of landscape. As a result,
I decided to join Takashi Takahashi's laboratory at the University of Tokyo on
the recommendation of Professor Fumihiko Maki.

That Professor Jinnai appeared in front of me and said, "I've seen many towns
all over the world, but I've never seen such an interesting town."

Johnson Town has become a place where people with disabilities, the elderly
and young people live, work and fulfill their dreams. 35 years have passed after
I started thinking to create that kind of town, living in Forest Hills Gardens in
New York. My dream seems to have come true.

On the other hand, the first buildings I designed 25 years ago were a
kindergarten and the Institute of Physical and Chemical Research. The current

照代先生、元海上保安庁だった同幼稚園園長濱川喜亘先生、そして至
誠保育園の稲永勝行先生、高橋紘先生、至誠学舎立川の元理事長高橋
利一先生から多くの幼稚園、保育園、児童施設と知り合うことができた。
私たちを信頼していただいた多くの人に育てられここまでやってきた。
この場を借りて深く感謝したい。

人の感性は幼い頃の経験で大部分が形成されるという。自然豊かな敷
地でこどもの施設を設計する時には、生物学者の祖父と山の上で感じ
た風が今でもよみがえってくる。

最近、90歳を超えた父に、設計に関わった橋はどれか尋ねたところ、
しばらく考えて「日本の橋のほとんどだ」と答えた。父が作った「橋
梁工学」(朝倉書店)は今もなお大学教育で使われており、在任中は国
交省(旧建設省)の「道路橋示方書」の編纂もおこなっており、「日本
の橋はそれらに基づいて作られている」のだから、ということだった。
父は広く「公共の福祉に役立つ技術」に人生を捧げていたのだった。
私たちが汎用性のある構造物や人を幸せにするまちづくりにこだわる
DNAは父から受け継いでいたのかもしれないと思う。

また、これから知り合い、仕事を共にする人たちのために私たちの技
術が役立ち少しでも幸せになればと願う。

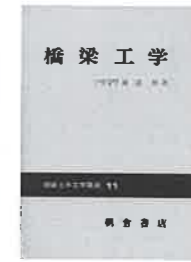
* JSSC No.49

父:渡辺昇



Father:
Prof. Noboru Watanabe

* 橋梁の教科書



Bridge Engineering
textbook

渡辺昇設計の世界初の曲線けた橋 *



World's first curved bridge
by Prof. Noboru Watanabe

mayor of Itabashi, Ken Sakamoto, who worked with me at a commercial
facility in Makuhari, introduced me to the kindergarten.

From the connection, many projects were built up.

In particular, I can get acquainted with many kindergartens and nursery schools
through Tamagawa Kindergarten teachers Mr. Hasegawa Yasuhiro, Mrs.
Hasegawa Teruyo, former Maritime Safety Agency's same kindergarten teacher
Mr. Yoshinari Hamakawa, and Shisei Nursery School teachers Mr. Katsuyuki
Inanaga and Mr. Hiroshi Takahashi.

I owe what I am now to those who trusted us. Their trust made us.

I want to take this occasion to thank you.

It is said that human sensibilities are largely formed by childhood experiences.
When designing a children's facility on a site rich in nature, the wind I felt on
the mountain with the biologist's grandfather still revives.

Recently, when I asked my father over 90 which bridge was involved in the
design, he thought for a while and replied, "It's almost all Japanese bridges." His
book, "Bridge Engineering" (Asakura Publishing Co., Ltd.) is still used for
university education. During his tenure, he also compiled the Ministry of Land,
Infrastructure, Transport and Tourism's "Road Bridge Specifications".
Ultimately, all bridges in Japan were made based on the technical criteria, that's
way. My father devoted his life broadly to "technologies for public welfare."

Come to think of it, we may have inherited from our father's DNA focusing
particularly on versatile structures and town development that makes people
happy. We also hope that our skills will be useful for those who we know and
work with, and we can make them a little happier.